

それでは、慶応の学生たちは今回の一連の安保法案の制定とそれに対するデモ活動についてどのように考えているのだろうか。実際に6人の慶応の現役の学生に意見を求めた。

「安保法案の制定には大筋で賛成。この法案の制定によって武器輸出なども緩和されるため派兵以外の形で国際的な影響力を増すことができるのではないか。」そう答えるのは経済学部2年のIさんだ。彼はまた、日本が軍事面での緩和を進めれば、軍事とは直接関係ない分野、例えば経済や国連での常任理事国入りへの支援、での協力を各国から引き出せる可能性が強まると考えている。同様に法学部法学科3年のIさんもこの法案に対して賛成のようだ。「アジア地域のパワーバランスが変化しつつある現代において日本の影響力保持のためには力の増大が不可欠。また、先進国である日本は積極的平和主義のもと世界の平和秩序の維持に努めるべきである。そのためにも海外でのPKO活動にも積極的に参加すべきである。」

また、一方で安保法制の内容ではなくその制定のプロセスに疑問を感じる学生もいた。法学部政治学科3年のFさんは「国際情勢の変化を考えると、安保法制そのものには賛成だが議論の成立に至るまでの議論の不成熟さと不鮮明さには不信感が残っている。」と話す。たしかに、議論の透明性に疑問を投げかけるメディアは多い。実際に文学部1年生のKさんは「自分は賛成か反対かはっきりとした答えがだせない。なぜなら、ニュースや新聞を見ていても情報が錯そうしていて判断を下せるほどの情報を得られないからだ」と答えている。果たして政府の国民への説明は十分といえるのだろうか。

今回のインタビューでは比較的安保法制に賛成の見解を持つ学生が多かったが、それと同時にSEALD'sの「デモ活動をする」ということに関しては肯定的な学生も多い。「学生のデモ活動は政治参加や表現の自由が保障されているので問題はないと思うし、日本は民主主義国家であるのだからデモがあるのは良いことだ。」(法学部法学科1年のIさん)

しかし、実際に自分自身の意思を「デモ」という手段を用いて表現しようとする学生は少なかった。文学部1年のKさんは「自分の伝えたいことがあったらインターネットなどその事柄について興味のない人たちにも少しでも目に入るようにして伝えたい」と話す。彼女は「自らの評価等も気にせず必死に活動している人の存在も知っています。特に学生、という立場でデモに参加している人は凄いなとも感じます」と答える一方で、実際にデモを行うと少なからずお祭りのようになってしまい、ただの思い出になって終わってしまうのではないかと危惧していた。さらに、商学部1年のSさんは「デモ活動はしない。はっきり言ってデモ活動は無力に近いし、学生の身分でそのようなことをしている時間はない」とまで割り切っていた。

今回インタビューした学生たちはいずれもデモは主張を表現するための一つの手段としては一定の評価をしているようであったが、もっとも効果的な手段とは考えていないようだ。

以上、現代過去のデモ、デモ経験者の話を聞いてきたが、そこから浮かび上がってきたのは世代の違いによる法案への考えの違いである。戦争を経験した世代は、法案改正を、戦

争をする可能性を少しでも高めるものとし、反対する。一方、戦争を知らない世代は、現在の戦争の可能性よりは、国際情勢を踏まえ、法案改正によるメリットを冷静に考え、学生を中心に賛成する人が多い。

加えて、彼らの法案を考える軸が違う。戦争を知らない世代は人名の尊さに軸を置き、それらを少しでも危険にさらさないことに主眼を置く。対して、戦争を知らない世代は、人命というよりは国としての損得に軸を置く。

また、今回の法案改正をめぐるデモは、「無意味なのではないか」「デモをやっている自分に酔いしれているのではないか」といった声も上がっていたが、近年問題となっていた、若者の投票率の低さに裏付けされた若者の政治への無関心を考えると、今回のデモにより、若者の政治意識に大きな改革を起こしたことがうかがえる。同世代の若者がデモをする姿は、「この国はいま、大事な分岐点に立っているのだ」という焦燥感を若者たちに与えたのではないか。安保法案の通過をデモは防ぐことはできなかったが、わたしたち民衆の意識を変えた。法案が通過したこれからも、抗う力としてデモは続いていく。